
俺とバカどもと幻想郷

サイクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とバカどもと幻想郷

【Zコード】

Z0684Z

【作者名】

サイクス

【あらすじ】

ある者から追われ、瀕死の重症を負った神楽一族の生き残り。そして一部の記憶も失つてしまつ。旅に出たその者の行き先はバカラスの世界！？他のオリキヤラも出す予定です！初めての作品で未熟なところもありますが。よろしくお願ひします。

すべての始まり

それは・・・些細な出来事だった。

幻想郷にて

? ? ? 「ハア・・・・ハア・・・・ハア・・・・」

俺が気が付いたときはもう、体力も限界を超えようとしていた。両手は血で染まっている。足もフラフラだ。視界まで霞んできやがる。

? ? ? 「くそつーーーのままじや・・・・・！」

追っ手1「いたぞ！逃がすなあーーー！」

追っ手2「殺してでもそいつを奪えーーー！」

ちッ、もつ追いついてきやがった。あまり使いたくなかったが・・・

? ? ? 「炎符『フレアグレード』ーーー」

咄嗟に放った俺のスペルカードは火を噴き追っ手たちに襲い掛かる。同時に俺の体から力が抜けていくのがわかつた。

- ・・・調子に乗りやがって・・・・・！だが。

？？？「ツハハハハハ・・・・まあいいや。」ここで終わるのも悪くねえな。」

幻想郷での思い出が頭をよぎる。天狗のなんつたつけな・・・・・ああ射命丸だつたか。そいつと競争したつけな。後、鬼の・・・・・伊吹萃香か。

そいつと力比べしたつけ・・・・全敗だつたけど。

もう力が入らねえ。後は終わりを待つだけ・・・・・・・・・。

？？？「フ・・・・・わらばだ。我が故郷・・・・・」

そつ眩きながら俺は意識を手放した。

「（いいえ・・・・・あなたは終わらないわ。心がそう言つていろ・・・・・）」

八雲邸

目が覚めたのは見慣れぬ一室だつた。そして俺の頭に疑問が残る。

どうこうことだ？俺は確かに死んだはず・・・・・。

『ナゼオレハイキテイル？』

? 「あら、ようやく目覚めたのね。さすがは一族の生き残り。たいした生命力ね。」

? ? ? 「あなたは・・・?俺を知つているようだが・・・。」

この家の主らしき女性がそこにいた。金髪の髪を下ろした綺麗な人だった。

紫「私は 八雲紫。あなた、名前言える?」

? ? ? 「ん?あれ・・・・・・・・・わからぬ。この幻想郷の最低限知識以外

なにも出てこない。思い出そうとしても・・・・・何もない・・・。」

紫「困ったわね・・・。名前がわからないんじゃ・・・。」

考え込む紫、困つてゐるようなのである提案をした。

? ? ? 「・・・あなたはさつき、『一族』と言いましたよね。一族と書つからには

何か苗字があるので?」

と、恐る恐る聞いてみる。え、何で敬語のかつて?
まあ、この人見るからに強そうだし。カリスマ、といふかなんといふか。

紫「ええ。あなたは古より伝わりし『神楽一族』。この幻想郷の中でも

トップクラスの戦闘能力と地位を持つ一族ね。」

それを聞いて俺は啞然とした。それって・・・

神楽（？？？）「それって大昔に滅んだ一族ですよね。ビリービリ」とですか！？」

紫「それが生きていたのよ。貴方だけね。」

神楽「え・・・？～～～～ツ！分からぬことだらけだ！」

取り乱す俺を紫は優しく制する。

紫「落ち着いて。・・・。そうね、まずは貴方の名前、考えましょうか。」

それには俺も同意見だ。

どうか、崩壊的なネーミングセンスじゃありませんよ!!・・・！

すべての始まり（後書き）

初投稿です！未熟ですがどうかよろしく・・・
えっと、更新スピードは不定期かもです。

次回は紫が神楽の名前を決める・・・のか？

第一問（前書き）

一話です。

一週間に2回の更新を目標としています。

それでは、どうぞ！

第一問

八雲邸

紫「それで・・・・・あなたの名前だけビ・・・・・あなたの髪と
田、空色だから・・・・

『空護』なんてどうかしら?」

神楽「空護・・・か・・・うん、いいかもな。これから俺の名は『

神楽空護』だ。」

あれ・・・・意外とあつたり決まつたもんだな。

どいじやの稗田さんみたいなネーミングセンスだと思つてたんだが。

(これは作者の勝手な想像です、お気になさりや)

紫「本当なら『』と泊めてあげたこと』だけビ、生憎空き部屋がないのよ・・・

だから、私が泊まるところを探してあげるわ。」

空護「そうか、それは助かるよ。すまないね。」

そういうと紫はお馴染みのスキマ空間を開ける。

その時、俺の頭に違和感があつた、いやできたといった方が正確い
か。

これは・・・・境界移動の知識が俺の頭に・・・流れ込んで来る・
・・・・

空護「ちよつと待つて。」

紫「何？」

空護「2つ確かめたいことがあるんだ、いいかな？」

紫「ええ、構わないわ。」

と、紫も承諾してくれたところで、俺はさつきの知識を元に紫と同じ境界を開く動作をしてみる。

すると案の定、紫と全くとまではいかないが、同じ境界が開いた。

紫「！・・・あなた・・・その能力！やはり神楽の血を引いてるだけはあるわね。」

驚愕に目を見開く紫、無理もない。自分特有の力が他人に易々と使われたのだ。

驚かないほうがおかしい。

空護「紫の境界を開く動きを見たら、頭に情報が流れ込んできただ。」

それと、一つ目だけど、俺の刀、知らないか？2本あるんだけど。」

紫「ああ、あれね。今持つて来させるわ。・・・藍？例の刀持つてきて頂戴！」

藍「はい、ただいま。」

しゃりくして、藍と呼ばれた女性は確かに俺の刀を持つてくれた。

空護「君が藍だね、俺は神楽空護だ。よろしく。とにかくありがとうな。」

藍「いえ、お気になさらず。」

紫「2人ともいい雰囲気のところ悪いと「どうがだ!」ですか!」「分かってるわよ・・・。」

それで? 2つ目は?」

空護「ああ、俺が覚えてる限りは、神楽一族は皆、2つ能力を持つ」と

教えられた記憶があるんだが?」

ん? いつの間に敬語じゃなくなつたって? まあ、危険な奴じゃないことは確かだし、

第一俺は、堅苦しいのは苦手なんだよ。

紫「その通りよ、あなた少し記憶が戻つて来たんじゃない? ひとつ・質問の答えね、

あなたの言う通り神楽一族は、必ず、2つ能力を持つのよ。そして、

あなたの能力が今まで目覚めた。」

なるほど、俺の勘はあつてたわけだ。そりあるあとは・・・

空護「能力の名前・・・どうするかな?」

紫「そりゃ…………『あつとあるおひるのを学び使役する程

度の能力』

なんぞどうかしぃ。」

長いな……が、でもじつか。とりあえず身を守る術はできた。

紫「さて、やつらに行きましょつか。藍に頼んだ結果ださゞ、守矢神社。

そこが弓を取ってくれるやつよ。」

空護「そりゃ、何から何までまないな。……んじゃ、行ってくる。

またここに来てもいいか?」

紫「ええ。いつでも歓迎するわ。」

「……と笑顔を浮かべる紫。……やべ、かわいすれる——／＼

そして俺は境界を開き中央へ入った。

第一問（後書き）

次は、プロフィール紹介でもしようかなと思います。

プロフェイールとか

オリキヤラ

名前 神樂空かぐらくう護

見た目は、雄一と明久を足して2で割った感じ。

髪と目の色は空色で、怒りなどで制御不能になると、髪は赤、目は金色になる。

年 見た目は16・7辺り。実際は結構いつてる

能力・ありとあらゆるもの学習し使役する程度の能力
・頭に描いた物を具現化する程度の能力

(用は、あらゆるものをつくりだせる。生命等は不可)

所属Fクラス

紫の推薦で文月学園に編入していく。

空護が、Fクラスで構わないというのでFクラスに。
紫によると、「かなりできる子」とのこと。

召喚獣

普段の装備は赤黒い甲冑で、FF7のセフィロスみたいな長い刀を持つている。

状況に応じ戦闘スタイルを変えられるが。10点を消費する。

得意教科は、数学と英語以外全て。調子がいいと一教科800点を超える実力の持ち主。

数学辺りになると200～300辺りまで落ちる。

腕輪

400を超えると基本的にスペカやFF・テイルズの技と同じ様な物が使える。

700点を超えたときのみ、幻獣を召喚できる。

バハムートやリヴィア イアサン

等、教科で変わる。

引き取り先の守矢一家は作者の想像でゲーマーということになつて
いる。

故に、ゲームの操作も慣れている。

プロフィールとか（後書き）

とりあえずこんな感じです。

次回かその次辺りでバカテス編へ突入したいと思います。

第一問

境界

引き取り先に藍を待たせてるから、わかるはずよ。
つて書つてたつナ紫は。にしても・・・

空護「この田んぼうにかならないかねえ・・・気持ち悪くて仕方
がない。」

まあなんにせよ、剣も守れだし、行き先見つかるし、紫に感謝だな。
ん?見えてきたな・・・っしー!

ズズズズズ・・・・!スタッ

空護「よ、待たせたな!」

藍「あ、空護さん。こちらです、付いて来て下さい。」

少年・少女移動中・・・・・・

藍「着きました。ここです。」

空護「おう、サンキューナー!」

お礼にとびっきり(?)の、恐らく人生初の全力の笑顔をおくつて
みた。

藍「／＼／＼／＼そつ、それでは失礼しますつ！／＼／

なんだ？やけに顔が赤かったよくな・・・。

?「おや、よつやく來たのかい？」

少し歩いたところにいたのは、なんか、ものつそいでかい注連縄をした人だつた。

これも、紫とは違つたカリスマ・・・・・・なのか？

空護「すまない、またせたな。」

?「気にするこたないよ。や、じつちだよ、着いてきな。」

空護「ああ。・・・・とこりで、名前は？

俺は神楽空護。」

加奈子「私は、八坂加奈子だよ。一応言つとくと私は神だ。他にも2人いるけど、

着いてから話すよ。」

空護「そうか。兎に角行くとじよつ。」

・・・・・・・・・・神？

神つてあのなんかやたらと皆信仰してゐるあれ？

まあ、そこは突っ込んではいけないとこなんだろ？

少年・神移動中・・・・・・

守矢神社

加奈子「おーい帰つたぞ～。」

?「お帰りなさいハ坂様。諏訪子様！お帰りになられましたよ～。」

?「あ～う～、お帰りー。つてそつちの子は?」

なんだらう～、いろいろと突っ込みどころがあるような気がするのは。
・
・
・

俺だけか？小っちゃい方の帽子とか、加奈子の注連縄とか。

加奈子「前に話したでしょうが。あの、神楽の生き残りの子を引き取るって。

この子だよ。」

空護「神楽空護だ。よろしく頼む。」

早苗「東風谷早苗です。この神社で巫女をしています。」

諏訪子「諏訪子だよ～。」

うん、まあいい人達ってのは確かみたいだな。

俺としても助かる。・・・・・あ。

空護「そういうえば俺、紫から手紙もらってきたんだ。着くまでは読むなって言つてたし、

折角だから、皆で読むか。」

早苗「そうですね。・・・にしても、なんて書いてあるんですかね？」

あの人、何考えるかわかんない人ですかね？」

加奈子「確かに、あの紫だからねえ・・・。」「

・・・・・すごく不安になつてきた。

つていうか紫、あんたは一体何をやらかしたんだ？

ま、まあ氣を取り直して読んでみよう。

空護 + 守矢一家へ

これを読んでいるという事はもつそつちに着いたみたいね。

突然だけど・・・空護、貴方と早苗は明日から学校に行つて貰うわ。制服、文具その他諸々はこっちで用意するから、ある程度準備しておいてね。

あ、ちなみに行つてもらつのは『文月学園』といつといづゆ。

そういうわけでもないじく

b>紫（17歳？）

…………?ナーニ?、アゴアド?

つて、はああああああー?

空護「どうことだよこれえ・・・。」

早苗「やつぱり、何があるんじやないかとは思つてましたが
まさかこれとは・・・はあ。」

空護「まあ、いいんじやないか?」ちらに不利と云つわくなではな
れやうだし。」

加奈子「やつこい」とだ。早く準備しな。」

なあ、何故あんたは楽しそうなんだ?
そして、諏訪子が結構空氣だつたな・・・。

第一問（後書き）

やつと4話です。

次回ついにバカテスワールドへ・・・?

第三回（前書き）

今回から本題の人名を無しにしたいと思います。
読みにくくてすみません・・・

第三問

はーじゅも空護です。とある事情で今俺は八雲邸の前に来ております。

え？何でかつて・・・・そりゃあ、ね？

いつもの面倒」とですよ。ただ、学校に行くだけってコトです。

ただ・・・

文月学園つて・・・・前に聞いたことがあるんだよね・・・。

八雲邸

「・・・きたわね。」

「ああ、つたくいきなりすぎないか？」

「ダメですよ空護さん。紫さんも考えがあつてのことだと感心します
し。・・・多分。」

「あ、それと2人とも、学校では貴方たちは姉弟として通つてもら
うわ。」

え？また爆弾発言？

はあ、もう、いい加減慣れてしまつた自分がいる……

「わ、私と空護さんがですか！？／＼／＼／＼

俺の横でめっちゃ顔を赤くしている早苗さん。んな恋人になるわけじゃあるまいし。

「いや、向こうへ行つたら早苗姉さんになるんだっけ。

「そして、貴方たちの監視兼守り役として妹紅に付いて行つて貰うわ。」

「初めまして……だな。あたしは藤原妹紅。竹林の案内をしている。よろしくな。」

「神楽空護だ。よろしく。」

「何故監視なんて聞かないでね。あなたが暴走したら洒落にならないから。」

何故考えてることが分かる……ってか

「なんで俺の暴走が前提になつてるんだ?」

「話してなかつたわね。……過去に貴方は力……いえ、貴方に流れる様々な血が……

貴方を暴走させ……一つの地域を壊滅させた。後に『白昼の悪夢』と呼ばれる出来事よ。」

……俺は一体何をしたんだ?なんだろう自分が怖くなつてきた。
え?様々な血?帰つたら紫に聞いてみようかな……

「ん?もうこんな時間か。早く行つたほうがいいかもな。」

「そうですね、紫さんお願ひします。」

「分かったわ。 も、準備して…… つともう準備万端ね。」

紫はそこへと描で空氣をなぞるよつに動かす。すると見慣れた境界が開いた。

「……んじゃ行つてくるわ。」

「ちなみに、向いにマンションの部屋を用意してあるから。いつでもこいつかと出入りができるよつにね。」

「そうか。 礼はこつとくよ。」

「そんじや……行くか!」

そして俺たちは境界に入り別の世界へ向かった。

文丘学園前

ズズズズズ…… スタッ

つて田の前に学校あるんですけどー?……まあ、でも。

「へえ……結構いいとこじゃん。ん?あれば……先生か?」

「やつみたいだな。…… もーーー。」

「ん？ よつやく来たのか。俺は西村宗一。補習担当の教師だ。」

そつ言つてきたのはすつゞへりつてい人。第一感想はそれだ。

「俺は東風谷空護、こつちは俺の姉さんの早苗。
んでもつてこつちが……」

「藤原妹紅だ。よろしく。」

「（小声）なんで同じ苗字にしたんです？」

「（小声）その方が姉弟つて感じが出るからね。それと話し方もそ
んな堅くなくていいよ。」

「俺そういうの苦手なんだ。」

しばらく小声で会話したあと、俺たちはとうとう西村先生について
ていった。

少年少女移動中

「よし、お前たちはここ待つてこな。」

「ん？ こは……学園長室か？
結構設備は悪くないな？」

「してもここで優雅な学校生活は送れるのだつが……」

第四問

学園長室前

「お前たち、入つていいぞ」

しばらく待つて聞こえたのはそんな野太い声だった。

「「「失礼します」「」」

ガチャツ
……

「きたかい。……ほお、あんたたちが紫の推薦つてやつかい。
みてくれば3人とも悪くないさね。」

部屋に入った瞬間コレだ・・・・・いやまで、今学園長（と思わ

れる人）は

紫って言ったか？

「学園長は紫と知り合いなんですか？」

念のため俺は知り合いであるかを確認してみる」とにした。

「ああ、……でもあいつは何考えてるか分かんない奴だからねえ……
今回の事だつてあまり信用してなかつたのさ。」

幻想郷を出てもこの評判つて……

「あの……クラスは何処へ行けばいいんでしょうか?」

「ああ……それなんだがねえ、生憎空いてるのは最底辺のEクラスだけなんだよ。」

「……マジかよ……あ、ちなみに俺たちは2年として入る」とになつてゐる……
らしく、いんだが……

「俺は別に構いませんよ。Eクラスに關しては我慢強いほりですしおれに……」

「「「それに?」」「」

「Eの学校は試験の点数を利用して戦争するんだろう? 上の奴等を引きずりおろす下克上つてやつを……やつてみたいんだよ。」

「はあ……やつとまともな生徒が入つたと黙つたら……」

「あたしも別にいいけど? ま、あたしは元々空護の監視で來てるからな。」

「わ、わたしもEクラスでいいです! 空護の姉としてついてこいきます!」

「お、早速呼び方変えてくれたんだ?」

前から思つていたが早苗姉さんは適応能力が高いみたいだな。

「話は決まったみたいさね。西村先生ここからを教室まで送つてや

りな。」

「分かりました。や、お前たち、付いて来い。」

少年少女移動中……

なんか途中で馬鹿でかい教室が見えたんだが……あれは、Aクラスか？

と、移動するうちにどんどん設備のランクが下がっていく。
なるほど、Aに近いほど設備が豪華になっていく、そして所属によつて

成績の良し悪しがわかる……というわけか。

「着いたぞ、少し待つてくれ。」

そう西村先生に連れてきてもらったのはオンボロのFクラス。
これじや、姉さんや、妹紅も集中して勉強できないかもな……

「今更ながら……なんかごめん。俺の選択は間違つてたかもしだ
い……

「こんな教室じゃ……」

と誰にも聞こえない程度の声で呟く。絶対に戦争で勝つて見せるよー。
だから……それまで少し待つていってくれ。姉さん、妹紅。

……少し時間が経つたようだが、ああ、担任の人と話してゐるのか。

「ここからは、空護視点と明久視点が混ざります。あしからず。

「全員揃いましたか？それでは自己紹介……といきたい所ですが、
転入生を紹介したいと思います。」

え？始業式に転入生？……誰なんだろう。僕は女の子だといいなあ
……

聞いてみよ。

「先生…」

「はい、なんですか？」

『『『『『女子生徒はいますか！－？』』』』』

僕が聞こえたとしたことみんなに先言われけやつた……

まあ、こんな男子ばっかりのクラスにそりゃ女子はほしいよね。
女子と言えば、クラスメイトの木下秀吉……

「吉井、なんか急にあんたを殴らなきやいけない気がしたんだけど
？」

女子の直感は恐ろしい……と、忘れてた。

この、ポーテールが特徴の子は、島田美波。去年から同じクラス
なんだ。

それよりも……

「ああ、それですが……」

いるのか！？いないのか！？

「2人女子、1人男子です。」

クラスの男子の魂の大合唱。

卷之三

『せんせーどうして男子がいるんですか?』

その質問ばかりどこと思ひつよへ

「話してませんでしたね、3人の内1組は姉弟ですよ」

『 チツ ... チツ

入ってきたら僕なりに仕やるべし」とある。それは……

「それでは、入ってきてもらいましょう……『じつぞう』

空護 Side - - - -

なんか先生が姉弟だつて事を言つた瞬間に険悪な雰囲気になりやがつた……

?正当防衛だし。

「それじゃ、行けつか。姉さん、妹紅。」

「「ええ（ああ）」」

ガラガラ……

「総員狙ええええええええええええつ……！」

『『『殺せええええええええええええ！……』』』』』

つていきなりかよお……？？？

なんか凶器投げられてるんだけど！？……まあいい。

……？やばい！このままじや姉さんと妹紅に当たる！？

ガキン！……

『なつ、弾き返しやがった……！』

「さあああて、てめえら……姉さん達に向かつて物投げるたあ……
いい度胸してんじやねえか……ええ！？」

『『『『つ……』』』』』

ちょいと齧かす程度に殺氣を発してみせる。
すると案の定バカ共は鎮まつた。

「……ほお、うちのクラスの奴等を黙らせるたあ、なかなかやるじ
やねえか……」

そつこつて尚も喧嘩を吹っかけてくるのは背が180はあるテカイやつだ。

「あ？ あんたもなんかあんのか？ 姉さんと、妹紅に手え出したあんた等が悪いんだろーが。」

「はいはい、そこまでだよ。空護あんたも落ち着きなつて。早苗が困つてゐるだらひつへ。」

「あ、「」めぐ。怪我はない？ 姉さん。」

「……なんか急に雰囲気が変わりやがつたな。」

隣ででかいのが田を丸くしている。姉さんの心配してたらそんなに変だらうか？

「静かにしてください。自己紹介を始めますよ。」

トントン…バキイツ…パラパラ…

「あー、替えを持つてくるので先に始めていくださー。」

「さて、始めるとするか。」

改めて「」の学校生活に不安を覚えた俺たちだった。

第四問（後書き）

「メント、アドバイス等ありましたら、お願いします。

第五問

2 F

「さて、みんな落ち着いたようだし、自己紹介を始めや。そうだな……廊下側のやつらから頼む。」

少しばかり睨み合っていた俺たちを制したの例の背の高いやつだ。そして、座禅を組んでいた生徒が立ち上がり自己紹介を始めた。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

そう先陣を切ったのは、秀吉とか言ひやつだ。小柄な体格で一見すると女子のように見えるが、男子の制服を着てるって事は男なのだろう。

「…………といつわけじや、よろしく頼む。」

1人目が終わると同時に、次の奴が立ち上がった。

「…………土屋康太。」

ん? 今度の奴はやけに寡黙なやつだな。ふむ、康太か、覚えておこう。

何か縁があるかもしね。

「すみません、ただいま戻りました。おや、自己紹介をもつ始めているようですね。

構わず続けてください。」

お？福原先生が戻ってきたみたいだな。

「…………です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です。」

あれ、女子も居たんだ、ま、読み書きができないってのは結構きついからな。

ちなみにだが、このクラスは圧倒的に女子の人数が少ない。道理で、男子共が女子はいないかと騒ぐわけだ。

「あ、でも英語は苦手です、ドイツ育ちだったので、趣味は？」

ん？趣味か？女子らしいじゃねえか。なになに、趣味は……？

「吉井明久を殴る」とです

少しでもまともだと思つた俺がバカだった……。オーラ

「はうはう～」

あれ、誰に挨拶してるんだ？

「…………あう、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

吉井？ああ、やつを攻撃の指示出してた奴か。ん一見るからにバカだな。そんな顔してるとし。

明久 side - - -

「 です、よろしくお願ひします。」

ん、僕の前の人があつたみたいだ。
こういうのは出だしは肝心だからね。軽いジョーク交じりの自己紹介にしよう。

「 コホン、えーと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んで
下さいね 」

『 『 『 『 『 ダアアアア――リイイイイ――ンン!――!――!』 』 』

野太い声の大合唱、う、コレは思ったより不愉快だ。

「 失礼忘れてください、鬼に角、よろしくお願ひします。」

さて、僕の紹介が終わつたみたいだし、残るは、転人生3人と
残りの人たちだ。

「それでは、東風谷早苗（早苗）からお願ひします。」

そう先生に促され姉さんが黒板前に立つた。大丈夫かな？

「東風谷早苗です。まだ、一いちにきて間もないですけどよろしくお願ひします。」

『『『』』』おおおおおおおお……』』』』』

またしても野太い声の大合唱。実に不快だ。

「はいじゃあ、次弟君お願ひします。」

ん？もづ俺の番か。さつきは威圧しそぎたからな……少し温厚に行こう。

「えー、東風谷空護だ、さつき先生が言つたよつこ、早苗姉さんの弟（仮）だ。

それと、さつきはすまなかつたな。」

とりあえず謝つてみる。……ん、少し、皆の表情が和らいだ。イメージアップ成功だな。

うん、少し付け足しておこうかな。

「それと、俺は姉さんの実の弟ではない。

……本名は神楽空護と書つ名前だ。」

自分で書つのもなんだが衝撃力ミーニングアウト。

「ちょっと、何いきなり真相はなしてるんだ（の）！？」

驚いた顔で妹紅と姉さんが詰め寄つてくる。そんな妹紅達をとりあえず引き離し、続けた。

「俺の嫌いなのは、話を聞かない奴、すぐ暴力に移る奴、自分の非を棚に上げ責任転嫁する奴、そして……人の幸せを踏みにじり、自分が幸せであれば良いという傲慢な奴だ。」

うん、コレに関しては俺の本音だ。実際そういう奴は大嫌いだからな。

「さ、妹紅、後は頼んだ。」

コレで俺の自己紹介は終わり。後は妹紅達だけだ。

「……なんか腑に落ちないが、まあいい。

えと、あたしは、藤原妹紅。得意教科は、歴史物全般と、数学で、苦手教化は、それ以外だな。ま、よろしく頼む。」

『『『『もこたあああああああああああああん！……』』』』

はい、本日3度目の大合唱。いい加減ウザイよ。珍しい……妹紅が冷や汗流してる。

呆れたころに不意に教室のドアが開いた。

「あの、遅れて、すみま、せん……」

『えつ？』

誰かのびっくりした声。そりや驚くわな。

「丁度良かったです。今自己紹介しているところなので、姫路さんもして下さい。」

「は、はいっ。姫路瑞希とここます、よろしくお願ひしますっ！」

見るからに頭のよさそうな奴だ。正直言つて、綺麗だ。

「はいっ！質問です！」

すでに自己紹介した生徒が高々と手を挙げる。

「あ、はいっ！なんですか？」

「何でーーーいるんですか？」

聞きよひによつては、てか誰が聞いても失礼だろ……今の質問。
姫路を知つていそうな明久つて奴に適当に聞いてみるか。

「なあ、姫路つてそんなに成績優秀なのか？」

「うん、1年のころに学年2位とつた人で、その後も常に一桁の順位のすごい人なんだ。」

なるほど……つて、そんなに頭良いのか！？

「その……試験のときに熱を出してしまつて……」

姫路の言い分を聞いて、クラスからもちらりと誰かが分といつぞの言い訳が聞こえてきた。

『そりいえば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、科学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『昨日彼女が寝かしてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがと』

想像以上にバカばっかりだ……

「そ、それではよろしくお願ひしますっ！」

逃げるかのようにでかいのと明久の間の席に着く姫路。

「あ、あのさ姫 」

明久が声をかけようとしてるな……告るのか？

「姫路」

明久の声をかぶせるようにでかい奴が姫路に声をかける。お隣で明久悲しそうな顔してやがる。

「は、はいっ、えーっと

「

「坂本だ、坂本雄一。よろしく頼む。」

ついでに俺も自己紹介しどくか。

「姫路……だつたか？俺は東風谷……いや神楽空護だ。よろしくな。

」

「あ、姫路瑞希です。坂本君、神楽君よろしくお願ひします。」

丁寧語とは……見るからに育ちがよみやうだな。

「といひで姫路、おまえ、体調はまだ悪いのか？」

「あ、それ僕も気になる。」

口を挟んできたのは……誰かと思えば明久か。

「よ、吉井君……？」

明久の顔を見て驚く姫路。

「姫路、明久が不細工ですまん。」

坂本、フォローになつてないぞ。

「そんな！、目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗ですし。全然不細工じゃないですか。その、むしろ……。」

「言われてみりや、そう見てくれば悪くないな。
俺の知人にも明久に興味を持った奴を知ってるし。」

「それって誰ですか！？」

「ものつそい食いつき方だ。ま、年頃の女子に珍しいことじやないし。

「確か久保　」

「久保？誰だ？」

「利光だつたかな」

久保利光（性別　名前からして　）

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな。」

明久……強く生きろよ。

「大丈夫だ半分は冗談だ。」

「ねえ、雄一残り半分は！？」

「はいはい、そこの人たち、静かにしてください。」

「あ、すいませ　」

バキイツ　パラパラ……

「すいません、もつ一度替えを持つてきまます。」

俺らの扱い……ホントひでえな……

あ、そうだー坂本に話があるんだつた。

「「坂本（雄一）」、ちょっと話がある。」

ダブつた……

「なんだ？」

「「「（）」」話しこいくから……廊下で。」

第五問（後書き）

次回……多分Dクラス戦に入ります。

第六問

2 - F 廊下

「で、話とは何だ？まあ、大方この教室の設備だろ？」

俺の考えを一発で当てるとはな……こいつ、口惜しいやない。

「ああ、やうだ。」

「うん、僕も同じ考え。」

「それでだが……、俺はAクラスに試合戦争を仕掛けようと思つ。」

「僕も。ていうかなんでいつも考えがかぶるの？」

明久、それは触れちゃいけない部分だ。

「何が目的だ。」

坂本の目が細くなる。少し警戒されてるようだ。
こうなつたら、本音言つたほうが早いな。

「いやだつてあまりにもひどい設備だから」

「嘘をつくな。全く勉強に興味のない明久が、今更勉強用の設備なんかのために

戦争起じやうなんて、ありえないだろうが。」

……本音を言つてしまえば早いものを。

「いやー、えーっと、それはその……」

「姫路の為……か？」

「ビクッ！」

「ど、どひしてそれを！？」

「やはりな、お前はカマをかけるとすぐ引っかかる……神楽は？」

「空護でいい。俺もこいつと大体同じ。姉さんや妹紅達の為だ。」

「そうか、 ん？先生が戻ってきたみたいだな。教室に入るぞ。」

「「ああ（うん）」」

坂本……いや、もう雄一と呼んでも良いか？
兎に角促されるまま、俺らは教室に入った。

「さて、自己紹介の続きを。」

「須川亮です。趣味は 」

また、淡々と時間が過ぎていった。

「坂本君。キミが、自己紹介最後ですよ。」

「了解。」

「坂本君はFクラスの代表でしたね。」

なんか、さつきまでと違つて代表らしさに雰囲気になつたな。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも、坂本でも好きに呼んでくれ。

……さて、皆にひとつ聞きたい。」

そういうつて雄一は、教室の隅々を見渡す。

かび臭い教室。

汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備のリクライニングシートらしいがないか?」

不満

『『『『『大あつじやああッ!』』』』

クラス全員の魂の叫び。これは同意だ。

「そこで俺は……代表として Aクラスに試合戦争を仕掛けようと思つ。」

その時雄一は戦争の引き金を引いた……

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんていやだ』

『姫路たちがいれば何もいらない』

いたるとこから悲鳴が上がる。

「そんなことはない。俺たちにはAクラスに勝てる要素がある。今からそれを証明してやる
おい康太、姫路たちのスカート覗いてないでこっちへ来い。」

「…………（ブンブン）」

「「は、はわっ！」」

「ほつ？ いい度胸じゃないか…………！」

あの姉さんはともかく、妹紅が気づかないなんて…………こいつ、できる……！

「土屋康太。こいつがあの有名な 寡黙なる性識者ハッジマーだ。」

「…………（ブンブン）」

『ムツツリーーだと……？』

『馬鹿な、奴が？』

『だがみる、未だに除きの証拠を隠そつとしているが……』

『ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ。』

康太 改め、ムツツリーノ。まだ隠すところのか。

「姫路のことは説明するまでもないだろう。力は良く知っているはずだ。」

「わっ、私ですか！？」

「ああ、うちの主戦力だ、頼りにしている。」

そうか、姫路も成績良かつたんだつけな。これは期待できる。

『そうだ、姫路さんがいるんだった。』

『ああ、彼女さえいれば何もいらないな。』

誰だ、せつから姫路にラブホール送ってる馬鹿は。

「木下秀吉だつている。」

『おお……！』

『あいつ、確か木下優子の……』

『こいつもなかなかできる奴なのか？』

「そして、一番の注目はこの神楽たちがどれほどできるかここに」とだ。」

『確かに三人ともできやうな奴らだ。』

『期待しているぞー!』

周りから応援の声が上がる。……正直悪い気はしない。

「それに、吉井明久だっている」

シーン…………

うん、やつぱりあいつはオチ扱いだつたか。大方予想してはいたが
……

「いてもいなくともそう変わらない。要は雑魚だ。」

その言い方はあんまりだと思つた?

「兎に角だ。俺たちの力の証明として、まずはロクラスを征服しよ
うと思う。」

皆、この境遇は大いに不満だらう?」

『当然だ!』

「ならば全員ペンを執れ!出陣の準備だ!…!』

『おお————つ……!』

「俺たちに必要なのは卓袱台じゃない！システムデスクだ！！」

『「うおお————つ——』』

「「「お、お————」」

クラスの雰囲気に気圧された姉さん達が若干引き気味だ。

「明久には宣戦布告の使者になつてもらひ。無事、大役を果たせ。」

「……下位勢力の使者つて、大抵ひどい目に遭つよね？」

仮にも使者だ怪我をしてはならんだろう。

「明久、だつたら俺も護衛で行つてやろつか？」

「だめだ。明久一人で行つてもいい。」

「それこそ駄目だ。どうせ、宣戦布告に行つた明久がフルボッコにされるのを楽しみたいだけだろ？」

「うぐつ……」

「おお。見事に俺の予感が的中だ。

「さ、行くぞ明久。」

「う、うん。」

ガラガラ……

「すみません、Dクラスの代表は居ますか？」

「待つてて、今呼んで来る。平賀ー！」

「なんだい？……って君たちか。で、何の用？」

そういうて現れたのは俺よりも少し背の低い、いかにもじっかり者の顔した奴だった。

「ああ、うちの代表がDクラスに宣戦布告する、とのことだ。
時間は……午後で良い。」

ザワザワ……

『おー、聞いたか？』

『あのFクラスが宣戦布告だと？』

『生意氣な。どうする、やつらがうが？』

あのな、全部会話が筒抜けだったの。
挑発してみるか？と、その前に。

「（小声）明久。」

「（小声）なに、空襲？」

「俺がDクラスの奴らにちょっとした、挑発をする。奴らが襲い掛かかってくるから、全力で逃げる……いいな。」

「そんな…………うん。分かった、やられるなよ。」

「よし……おい、Dクラス。来るなら来いよ、相手してやるぜ？ 怪我しないかは保障できんがな。」

『なに？』

『生意氣な……殺るぞ？』

「お前らの相手はコレで十分だ……いくぜ！」

狂乱「シユタイフュ・ブリーザ」

ん？これ、テイルズの技じゃんつて？仕方ないでしょ。

姉さんとりースやつてて、サレの秘奥義見たら手にスペカがあつたんだもん。

詳しく述べ後で話すよん。

ズドーン

「うーん、手加減したつもりなんだがな。まあ、いいだろ？」

続ければ試合戦争でしてやるよ……それじゃ、アティオス」

後ろでのびてゐるロクラスの奴らが山のよつて積まれたのは……見なかつたことにじより。

「クラス

「うん？ 帰つてきたか…………あ？ 空護はビリした？」

「ただいま。空護ならロクラスの人を引き受けている。」

カツカツカツ……ガラガラ

「おーい、帰つたぞー？」

「おー帰つてきたか。どうだ、ちゃんと宣戦布告してきたか？」

「抜かりはない。午後からと伝えてきた。」

なんだらう、やけに脱力感。

「大丈夫か（ですか）？」

「ああ、問題ないよ。心配してくれてありがとう。姉さん、妹紅も。」

「

「／＼／＼／＼／＼」

あはは……メツチャ顔赤くしてる。

『『『『チツ……』』』

後ろで呪いの声が聞こえるがとりあえず無視。

「それじゃ、先にお皿にしませんか？開戦も午後からですし。」

「だな、んじや、屋上に行くか。作戦も話さないとな。」

「んーっ、さすがに腹減ったなー。空護、飯は持ってきたのか？」

「ああ、それに關しても抜かりはない。姉さん達の分も作ってきたから。」

もしかしての」とも考えてきたから……ね？

屋上

「明久、昼くらいまともな物を食えよ。」

「そう思つならパンでも奢つてくれると嬉しいんだけど。」

「明久君はお昼は食べないの？」

姉さんが驚いた顔で明久を見た。

まともな生活してれば昼はちゃんと食べる筈だが……

「一応食べてるよ。」

「……あれは食べてると言えるのか？」

え？ ビックリした？ 明久は少食つて事じゃないのか？

「何が言いたいのや。」

「お前の主食つて……水と塩だろ？。」

一瞬、言葉を失つた。水と塩だけで生きてきてるのか？
色々とオカシイダロ……

「失礼な！ 砂糖だつてちゃんと食べていらー。」

「吉井君……それは食べてるとは言こませんよ。」

「食べるといつより、舐めるの方が正しいじゃんつな。」「
もつ、みてりゃんないよ……

「明久、俺の昼飯……少し食つて良いぞ……？」

「ほ、本当ー？ ありがとう空護ー。」

そんなこんなで俺の昼飯は殆ど明久に食われた。

次からは、明久分の弁当も作るのか……ハードだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0684z/>

俺とバカどもと幻想郷

2011年12月20日18時53分発行